

第2部： 特別講演 Rhan 2: Y Ddarlith Arbennig

丘を下りて—現実と向き合う過程で
Eglwys-fach 時代の R.S. Thomas 試論

永田 喜文

Descending the hills - To face the reality: R.S. Thomas in Eglwys-fach
Yoshifumi Nagata

Abstract: R.S. Thomas (1913-2000), a priest for the Church in Wales and Anglo-Welsh poet, started his career as a poet when he got promoted as a rector in Manafon. His career is divided into three periods according to his parishes: Manafon (Early), Eglwys-fach (Middle), and Aberdaron & after (Later). In the early period, he showed us the hill-farmers' harsh lives upon the moor through his poetry. He also composed patriotic poems. After Manafon, he moved to Eglwys-fach and then to Aberdaron, a remote seaside village on the Llyn Peninsula, North Wales. On reaching Aberdaron, he abandoned these themes and began to search for God in the midst of the modern technological world. Thus a large gap lies between the early period and the later. Poems in the middle period have elements of both; he went on to write about Manafon hills instead of picking up Eglwys-fach as a theme. His patriotism became more and more intense as the political situation in Wales worsened between the 1950s and 60s. The intense patriotism led him to despise not only the English but also the Welsh, because they did not take a step against English oppression. He also tried to look for God's presence and reach Him through an 'untenanted cross' in his parish church. Thus themes in this era seem to be ambiguous to us; because of this, some of his readers may discover great difficulties of interpretation. However the poetry in Eglwys-fach serves as a bridge over a gap lying between Manafon and Aberdaron.

1. はじめに

英国国教会(ウェールズ聖公会)の牧師 R.S. Thomas (Ronald Stuart Thomas, 1913-2000)は、1942年10月にウェールズ中部の国境地帯に近い、丘に囲まれた過疎の村 Manafon の教区牧師として赴任して以来、その死の直前まで60年近く英語で詩作を続けた詩人である。トマスの詩は生前より高い評価を受け、

数々の賞に輝くばかりか、1996年にはノーベル文学賞にノミネートされもした。このためトマスは20世紀最大の^{アングロ・ウェルッシュ・ポエット}英語で書くウェールズ語詩人と呼ばれ、その評価は現在に至るまで衰えることはない。今回の講演ではそのトマスが、先の Manafon を離れ、西ウェールズの Eglwys-fach 教区に赴任してから次の Aberdaron に移るまでの期間に焦点を当てた。

2. トマスの活動時期とその作風について

トマスの活動期は、通常、その教区によって分けられる。つまり最初の教区 Manafon 時代を初期、次の Eglwys-fach 時代を中期、そして最後の教区となる Aberdaron およびそれ以降を後期とする。これはトマス自身が自伝 *Neb* で自身の生い立ちを自身が過ごした村ごとに分けて記していることや、Brian Morris 氏が「R.S. Thomas が自分のために選んだ環境は、自身の思想や芸術に深遠かつ創造的な影響を与えてきた。」¹と述べていることに影響が大きいと思われる。

その初期にトマスは、中部ウェールズの丘の自然や、そこで暮らす農夫らの過酷な生活を詠った。有名なキャラクターの Iago Prytherch が初登場するのもこの時期である。同時にウェールズ愛国者の先駆的存在であるサンダース・ルイスに傾倒、愛国者的な詩を描きもした。

一方後期には、これらの主題は完全に失われる。Iago Prytherch は、後期が始まる直前に発表された『The Grave』(1969年)で抹消される。代わりに詩の主題に選ばれたのは、現代社会における神の探求であった。

以上のように初期と後期の間に関わる隔たりは、非常に大きい。その隔たりを埋めるのが、中期である。——これら中期の詩では、前期の主題が受け継がれ、同時に細分化・深化され、一部は苛酷なまでの様相を帯びる。中でも愛国主義的な詩や、この時期から現れる私小説的な詩では、理想と現実の狭間でトマス自身が悩む姿が描かれる。その言葉のエッジは研ぎ澄まされ、詩は時に痛々しいまでの感情の吐露となる。また一方で神の探求という詩の主題も、後期とはやや異なるアプローチで現れる。中期はこのように、前期と後期の間に関わる大きな隔たりを埋め、橋渡しをする存在であったと言えよう。

3. 希望と現実の間に関いた大きな隔たり

トマスが教区牧師に昇進し、就任した最初の教区 Manafon は、自然あふれる丘の村であった。ここはトマスの抱く理想のウェールズ像に近かった。すなわち文明を拒否し、自然と密接に生きる共同体である。トマスは理想に燃え、その夢を実現化すべく、農夫ら教区民に熱く語りかける。だが若い牧師の理想論は、教区民にとってはまさに夢物語でしかなかった。そしてトマスは赴任して

数年で夢に破れ、その夢の名残を引きずったままこの村で牧会を 12 年間続けることになる。

そのような折、西ウェールズの *Eglwys-fach* の牧師が引退する。そこでトマスは転属願を出し、それが受理される。そして 1954 年 10 月、トマスは丘の村 *Manafon* を降り、西の *Eglwys-fach* に赴任する。

西ウェールズといえば、北部と同様、ウェールズ語話者が多く暮らす。故にウェールズ独自文化を守り続けてきた。従ってこの村もまた、トマスの理想のウェールズ像と合致しているように思われた。

しかし現実とは異なった。この村では引退したイングランド人富裕層が、ウェールズ人を使用人として雇い、その余生を過ごしていた。実にこの時代より、特に北西部の土地の安価さに惹きつけられ、イングランド人が移り住むようになっていたのだ。つまりトマスは敵と掲げるイングランド人の居住区に、自らを投げ込んでしまったのである。

加えて彼ら教区民にとって、牧師は日常のトラブルなどを相談するはけ口であるか²、礼拝や葬式、結婚式やクリスマスといった式典を挙げるために必要な存在でしかない。後にトマスは「イングランド人が教区を植民地化した時、教区牧師の仕事は儀式のみを取り仕切る役目でしかない」³と吐露するほど、両者の感情の間には大きな隔たりがあった。実際に牧師とその妻はこのような村人の間であって、孤立した⁴。このような隔たりは、‘Service’などの詩で赤裸々に詠われている。

4. 離れた「丘」

このようにストレスに満ちた現実から逃避するかのごとく、トマスは以前にも増して詩作にのめり込む。そのためか前期より受け継いだ主題は更に細分化・深化され、一つの詩集は複数の主題を扱うようになる。この主題のうちのひとつが、*Manafon* の丘に住む理想の農夫 *Iago Prytherch* を描いた『離れた丘』である。

トマスの *Manafon* 時代の詩は、その丘の村の観察から生まれた。同時にそこで暮らしていた際には、嫌悪を感じ、時に罵り、さらに捨てるようにして出てきた丘の村とそこで暮らす農夫らに、トマスは強いヒラエスを感じるようになる。だが西端の *Eglwys-fach* から東の国境地帯付近の *Manafon* に帰るのは、現実的に無理である。そこでトマスは *Iago* とその丘の村を、完全なる想像の産物として詩に復活させる。

かつてトマスは *Iago* を、トマスが理想とする太古のウェールズに唯一通ずる存在として描いた。*Iago* は今、その太古のウェールズが持つ原初の力を纏い、

自らの体内を流れる濃い血潮に、強国イングランドに敗れた敗者ウェールズ悲劇の歴史を内包する。その時、牧師(=導く者)と、教区民(=導かれる者)の立場が逆転する。牧師トマスは Iago に「いつでも正しかったのは君だった」

(‘Absolution’) と「赦免」を乞う。だが Iago は答えない。ただ黙すのみ。代わりにトマスは、その Iago の体の内から「敗者ウェールズの歴史」を汲み上げ、その苛酷な現実／事実を真正面から受け止める。そしてウェールズが古来より受けてきた支配国イングランドからの迫害と圧政を、自らの詩を通じ読者にまざまざと提示する。その真実提示の様相は、聖餐式のパンとそれを裂き、会衆に分け与える様子にもなぞらえられる (‘Servant’)。

5. ウェールズを詠った詩

特にこの時代、トマスは上記のようなウェールズを詠った詩を多く残している。時にそれは伝承やウェールズ語詩、歴史の引用という形で現れ、いずれの場合も英語詩ながらウェールズの独自性を表現することに成功している⁵。中でも‘Genealogy’は、注目に値する。ここで詩の主人公はまるでバルズ(Bardd)のごとく、ウェールズの歴史上の人物に次々転身する⁶。その主人公は現代にたどりついた瞬間、その居場所を失う。これはウェールズの独自性は過去に根ざしていることを示唆し、現代化されたウェールズとは根本的に相容れないことを示す。

一方でトマスが Eglwys-fach に移った 54 年から、この時代の幕を閉じる詩集 *Not That He Brought Flowers* を出版する 68 年までの間は、ウェールズは社会的・歴史的に変革の時代を迎え、同時に愛国者らの活動が活発化する。55 年のカーディフ首都認定を皮切りにウェールズにとって有益な事柄が押し寄せる一方で、中央政府によるウェールズ語撲滅運動の一環としてウェールズ語話者の村カペル・ケランがダムの上に埋められるなど、否定的な側面も多かった。これらの社会的事象にトマスは敏感に反応した。トマスは愛国者らの集まりでもあるウェールズ語協会やウェールズ版 IRA とも呼ばれた MAC らを支持し、愛国者的な詩を書き、この時代に一矢を報いた。また先のカペル・ケランを描いた詩‘Reservoirs’では、イングランドによるウェールズ語および文化の徹底的な撲滅を告発し、同時に如実に怒りを露わにする。

またこの時期から活発化する観光開発と、ウェールズの不動産の安さは、多くのイングランド人をウェールズに招き入れた。移住者の多くは、ウェールズ語母語者の暮らす土地を買い上げ、結果、ウェールズの英語化が進む。——ウェールズ語はトマスら愛国者らにとって、愛国心の表れだった。故にウェールズの英語化 (=ウェールズ語使用者の減退) はトマスのフラストレーションを

引き起こす。トマスはイングランド人を強く拒絶する（‘Welcome’参照）。だが入ってくる彼らを止められない。故にトマスの詩は苛酷さを増す。同時にトマスは、ウェールズ語を以前にも増して強く欲するようになる。

しかしここにひとつの矛盾が浮かび上がる。それはトマスが英語話者であるという確固たる事実である。すなわち愛国心の表れとしていくらウェールズ語を欲しても、ウェールズ語はトマスの第1言語にはなりえない。トマスの第1言語は、あくまでも英語である。この言葉の問題は、アイデンティティの問題につながる。英語で考え、英語で詩作をする。それでもウェールズ人と胸を張れるだろうか、と、トマスは自問する。‘Welsh’ではトマスはその問題の間で揺れ、「その言葉（註：英語）から解放される／ために、私は自身の／言葉がほしい」とまで吐露する。だが問題は解決されない。ゆえにトマスの中でフラストレーションだけが募る。ウェールズ語を失ったやり場のない怒りは、イングランド人に向くと同時に、このような状況においても何もしない同族への怒りにもなる。‘Welsh Testament’は、そのような怒りを内包した、最も苛酷な詩である。怒りが募るにつれ、トマスは「神ですらウェールズ語名を持っていた」と、この地から神が消えたのは民がウェールズ語を失ったからだと吐き捨てる。

6. 神を描く

トマスにとって神は、自然を通じて語りかけてくれる存在だった。しかし現代化がもたらした環境破壊や観光開発により、神の存在を伝える「自然」という媒体が失われていく。そして神は姿も見せず、その声も聴かれない。トマスは後期の時代には、そのような神を「沈黙／静寂の神」と呼び、その沈黙／静寂こそが神の存在のあかしであると説く。しかしこの中期では、神が喋らぬのならば、その神を現代に引きずり出してやろうと思う。——この時代、数こそは多くないものの、トマスは現代ウェールズを舞台に、神や神に通ずるキリストの磔像を描こうとする詩を残している。

中でも際立っているのは、66年の詩集の表題詩‘Pieta’であろう。トマスは後に絵画を通じ神を描くという試みを行っているが、この詩はその先駆的な詩でもある。ここでトマスはゴルゴダの丘と中部ウェールズの丘を重ねて描く。その中心に「不気味で、^{あるじ}主不在の 背の高い『十字架』(“The tall Cross, / Sombre, untenanted”)を置く。この絵の中に描かれた Cross こそが、キリストが磔にされた唯一の十字架である。それは Cross の頭文字 C が、神に通じることを表わす大文字で始まっていることから明らかだ。そしてトマスはこのオリジナルかつ最も神聖な『十字架』に、自らの教会の祭壇に掲げられた十字架を通じて触れようと、信徒らのいなくなった深夜の「教会で」(‘In Church’)「主不在の十字架」の前に独り跪き、祈りを捧げる。

Often I try
To analyse the quality
Of its silences. Is this where God hides
From my searching? ...
There is no other sound
In the darkness but the sound of a man
Breathing, testing his faith
On emptiness, nailing his questions
One by one to an untenanted cross.

しばしば私は試みる／教会の静寂の質を／分析しようと。ここが私の追究を
逃れ／神が隠れた場所なのか？ ……暗闇の中に他の音は／ない、己の信条
を空虚の上に／試し 己の質疑をひとつひとつ／主不在の十字架に／釘で
打ちつけてゆく男の息吹を除いて。

トマスは独り暗闇の中、自らの信条の強さを試すべく、疑念をひとつひとつ
その「十字架」に打ちつける。しかしそこに答はない。神からの声もない。あ
るのは静寂と、トマスの荒々しい息遣いのみ。救いも何もない。トマスはこの
苛酷な事実を真っ向から受け止める。そしてその真実を、自らの詩を通じ赤裸々
に伝えてくる。

トマスの中期の詩には、この詩に限らず、苛酷な様相をそのまま伝えてくる
ものが多い。それはトマスが苛酷な現実から、たとえそれが不条理なことであ
っても、逃げずに、正面から挑んだからだ。だがこのような状況下では、普通
の人間ならば心が壊れ、平静さを求めたくなる。トマスも例外ではない。先の‘In
Church’が含まれる詩集 *Pieta* をクライマックスに、続く詩集 *Not That He
Brought Flowers* では、後半に向かうに従って静かな詩が多くなる。‘In Church’
と同じく教会で跪くことを詠った‘Kneeling’では、同じようにトマスの疑念にこ
たえる神の声はない。だがそこに苛酷さはない。むしろ優しさすら漂う。トマ
スはここで教会の静寂な空間に身を委ね、神の声をただただ待ち続ける。そし
て「待つことに意味がある」と静かに詩を締めくくる。

そしてトマスは変化のない一日一日の繰り返しに身を委ねるようになる。か
つてのように人々の愛国心を扇動することもなければ、不在の神を探し求める
こともない。その日々は単調の一言に尽きる。だがその中でさえ神に通じる道
が一瞬、現れる時もある（‘That’）。

The shadow of the tree falls

On our acres like a crucifixion,

樹の影が我らの土地に

キリスト受難の十字架像のごとく 落ちる

この樹の影に投影されたのは、‘Pieta’で垣間見た「不気味で、^{あるじ}主不在の／背の高い『十字架』」の現化に他ならない。この木の枝葉の間には一羽の鳥がいる。ケルトでは鳥は叡智の存在として知られるが、果たしてこの鳥も、先祖代々歌い継いできた自然の叡智を、自らの調べに載せてひとつひとつ、トマスがかつて「主不在の十字架」に疑念を打ちつけたように、私たち人間の肉体に打ちつけ、根づかせていく（「一羽の鳥がその枝の中で／自らの甲高い声で鳴く種がいつも歌い継いできた歌を歌う／その調べを故国に向け ひとつひとつ／我らの短命なる肉体に 打ちつけていく。」）。トマスはここで、神は自然を通じて語りかけてくるのだと、その信念を強くする。そう悟ったトマスは教会を出で、外の世界で神の探求を始める。それが後期の詩となる。

7. 結論に変えて

トマスはこのような過程を通じ、現実を認識する。そして Eglwys-fach から最後の教区となる Aberdaron に移ってからは、この時代に詠われた主題は、神の探求を除き、破棄される。後にプロパガンダ詩など愛国者的な詩は「明らかに過失だった」と認めもする。

ではこれら Eglwys-fach 時代の詩は、全く生まれる必要がなかったのだろうか。この疑問に答えるひとつの手掛かりとして、ここで 1963 年にトマスが編纂した宗教詩集 *The Penguin Book of Religious Verse* を見てみよう。この詩集の構成と序文は、トマスの宗教観を知るのに非常に有益である。

トマスはこの詩集を 5 つのセクションに区分けする。それぞれ最初から GOD (神)、SELF (自我)、NOTHING (否定)、IT(非人間的な存在＝超自然的な存在)、ALL (全知全能の神) となる。この順番は意図的なものであり、序文によれば「神」とは「神との出会い」を詠った詩である。つまり人は神と出会い、自我の探求、否定、非人間的な存在の認知を経て、初めて全知全能の神(=ALL)にたどり着く。中間の「否定」に関してトマスはその序文で、「地獄にすることができる能力は精神的な特権であり、地獄の本質をはっきりと提示する。私たちの知りうる世界では暗闇なしには、光は称賛されることはない。悪なしには、善は全く意味をもたないだろう。」と述べる。つまり世の中には必要悪があり、その悪こそが神の存在を際立たせるというのだ。

これをトマスの詩人としてのキャリアに重ねれば、初期においてトマスは自然を通じ神を知り、中期で「自我の探求」「否定」「非人間的な存在」を経験する。そして後期では神の探求が始まるが、これはオーソドックスな神ではない。それはトマスが「沈黙の神」とも呼び、「数字や数式の神」とも呼ぶまさに ALL な存在である。

つまりこの中期の苛酷な時代・苛酷な詩がなければ、その後の「現代社会における神の探求」はあり得ない。従ってこの中期は、トマスにとって後に大きな飛躍を遂げるための、自らの魂を暗黒の巡礼に迷わせ、その苛酷な現実之魂を鍛え上げた時代でもあったと言える。

註

1. Brain Morris, "The Topography of R.S. Thomas", ed. by Sandra Anstey, *Critical Writings on R.S. Thomas*, (seren, 1992), p.112
2. cf., R.S. Thomas, *Autobiographies*, translated by James Walford Davies, (Dent, 1997), p. 67
3. R.S. Thomas, *The Echoes Returns Slow*, (Macmillan, 1988), p. 52
4. Bryan Rogers, *The Man Who Went Into the West: The Life of R.S. Thomas*, (Aurum, 2006), p. 204
5. 伝承やウェールズ語詩の引用に関しては'Boarder Blues'などの詩を、歴史に関しては'Hyddgen'などの詩を参照のこと。
6. バルズは吟遊詩人とも訳されるが、古代よりウェールズの宮廷に仕えた官吏である。その主な役割は歴史や詩歌の暗誦だが、同時にバルズは言葉の魔法を操り、生きながらにして様々な生に転生したという。